遊戯王ＧＸ～象徴を操る者～

エギル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
遊戯王ＧＸ～象徴を操る者～

【Ｎコード】
Ｎ１６０９Ｙ

【作者名】
エギル

【あらすじ】
デュエルアカデミアの試験に遅れて来た双子の兄妹、遊城十代と遊城刹那。彼らの物語が始まる…。不定期更新になりますが、よろしくお願いします。

第一話　双子と精霊

晴天の下、二人の少年少女が街中を全力疾走していた。
今日は、デュエルアカデミア入学試験の実技試験の日。当然ながら二人とも試験に間に合うように電車に乗ったのだが…

「遅れる遅れる遅れる！」

現在、すでに受付どころか試験の開始時間さえも過ぎていた。

「こんな日に電車が遅れるなんて！いやエキサイティング！これは俺達に与えられた試練なんだ！」

「十代、叫ぶ暇があるなら走ろうよ」

「なんだよ刹那！今だって走ってるだろ！ていうか、叫ばずにはいられねーだろ！」

少年、十代は叫びながら走っていると並走していた少女、刹那に注意されてしまい少し不機嫌そうな顔で刹那を見る。

【でも、急がないと不味いんだろう、十代。刹那の言うように走るのに専念した方がいいんじゃないかい？】

【……】（コクッ）

二人が走っていると、十代の精霊のユベルと刹那の精霊、魔法（マジカル・マ）の操り人形（リオネット）のオドが話しかけてきた。
オドは一言も話さないがこの場にいる者達は当然のように理解でき

るのでコミュニケーションには問題ない。

「！十代、前」

刹那を見ていて前方不注意になっている十代の前に人が立っていた。刹那の言葉で前を見た十代は止まろうとしたが、全力疾走していたのですぐに止まることはできなかった。

「うわっ！」

相手にぶつかってしまったが、十代が必死にブレーキをかけていたおかげで相手は倒れずに済み、十代は後ろに倒れ、カードが辺りに散らばった。

「すみません、大丈夫ですか？」

「ごめん」

二人はぶつかった相手に謝るが、どこかで見たような姿に思わず相手を凝視してしまう。ユベル達も驚いているようだ。

「君達、デュエルをやるのかい？」

ぶつかった相手が話しかけてくる。

「はい、これからデュエルアカデミアの受験に行くんです」

刹那が答えると、彼はデッキホルダーから一枚のカードを取り出した。

「ラッキーカードだ。こいつが君の所に行きたがっている」

彼はそのカードを十代に手渡した。

「えっ。ありがとうございます！」

「がんばれよ」

そう言うと、彼は歩いて行ってしまった。彼から渡されたカードはハネクリボーだった。

【クリクリー】

【へえ、良かったじゃないか十代。あの人に精霊のカードをもらえるなんて】

「十代、時間」

十代は驚きと感動で少しぼーっとしていたが刹那の言葉で我に返り、二人は試験会場に向かって再び走り出した。

第一話　双子と精霊（後書き）

感想やアドバイスなどよろしくお願いします。

第二話　実技試験　ＶＳ十代（前書き）

第二話修正完了しました。

第二話　実技試験　VS十代

十代ｓｉｄｅ

何とかぎりぎりで受付に滑り込んだ俺達が試験会場に入ると、一人の受験生が破壊輪で試験官のライフを０にした。

「スッゲェな、あいつ」

「当たり前だよ。受験番号１番、筆記試験のトップなんだから」

俺の言葉に、隣にいた気弱な雰囲気のメガネの男子が答えた。受験番号ってそういう意味だったのかと感心していると隣にいた刹那にジト目で見られた。

【十代、それちゃんと試験要項に書いてたよ】

ユベルのため息を聞き流しているとすぐ近くにさっきの受験番号１番がやってきた。少し挨拶に行くか。

「さっきのデュエル凄かったな。今年の受験生じゃ、お前は２番目に強いかもな」

受験番号１番がどうして自分が１番じゃないのかと聞き返したから、俺は刹那の肩を組んで笑いながら答えた。

「１番は俺達だからさ！」

「十代、その考えだとこの人は３番だよ」

「細かいことはいいんだよ」

『受験番号１１番、遊城十代君、デュエルステージへどうぞ』

刹那達と話をしていると放送で呼ばれた。

「おっ、行ってくるぜ」

「十代、頑張って」

【こんなところで負けるんじゃないよ】

【クリクリー】

【……】（ぐっ）

「おうっ！」

皆の声援に応え、ステージに向かった。俺の相手は誰だ？

十代ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

刹那ｓｉｄｅ

十代の相手は実技最高責任者らしい。さてと、ここから応援しますか。

「ねえ、さっきから気になってたんすけど。もしかして親戚なんすか？」

デュエルが始まるのを待っているとさっきのメガネ君が質問してきた。

「よくわかったね。いや、当然か。私達は双子だよ」

「やっぱりっすか。でも双子でも性格は全然違うんすね」

私達の見た目はそっくりで、周りの人に髪を伸ばすよう頼まれるほど見分けがつかない。現在はセミロングだ。本当は十代と同じ髪形にしたいのだが…。

そして、彼の言う通り私達の性格は表面上は真逆だが、ユベル曰く、私にも十代のようなところがあるらしい。よくは分からないが。

「君、彼は強いのか？」

受験番号１番が振り向いて聞いてきた。

「まあね、もうすぐ始まるみたいだ。見ていればわかるよ」

刹那ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

十代ｓｉｄｅ

「この由緒正しきデュエルアカデミアの試験に遅れるなど言語道断！ドロップアウトボーイ達はワタクシが相手をするノーネ」

「受験番号１１番、遊城十代です。よろしくお願いします」

この特徴的な喋り方の人が俺の相手か…。どんなデュエルになるかワクワクしてきたぜ。

「「デュエル！」」

クロノスＬＰ４０００
十代ＬＰ４０００

「ワタクシのターン、ドロー」

お、笑っているな。いいカードが来たみたいだ。どんなモンスターが来るんだ？

「ワタクシはカードを２枚伏せ、手札から《大嵐》を発動ナノーネ。フィールド上の魔法・罠を全て破壊するノーネ」

フィールド上に強風が吹き荒れ、カードを破壊した。先生のカードも巻き込まれてるぜ？何が来るんだ？

「ワタクシは破壊された《黄金の邪神像》の効果により《邪神トークン》を２体召カーン。そして《邪神トークン》を生け贄に《古代（アンティ）の機械巨人（ーク・ギアゴーレム）》を召喚するノーネ」

古代の機械巨人　ＡＴＫ３０００

破壊された罠カードから金色のトークンが出てきたと思ったら、すぐに巨大な機械のモンスターが出現した。

「すげえ！すげえ！１ターン目から最上級モンスターを出すなんて、本当にすげえ！」

【さすが、実技最高責任者なだけはあるね。でも、あのモンスターは十代の敵じゃないね】

ユベルが俺の手札を覗き込み、笑いながら言った。確かにこれくらいの攻撃力なら対処できる。刹那が出すモンスターは時々化け物になるからなあ…

「褒めても何も出ないノーネ。ターンエンドなノーネ」

クロノスＬＰ４０００
手札：２枚
モンスター：古代の機械巨人
魔法、罠：なし

いけねっ、ちょっと集中が切れてた。今はこのデュエルを楽しもう！周りが何か言ってるけど気にしない。

「俺のターン、ドロー。俺は《Ｅ・ＨＥＲＯエアーマン》を召喚」

エアーマン　ＡＴＫ１８００

「《エアーマン》の効果発動！このカードが召喚・特殊召喚に成功した時、２つの効果を選んで発動する。俺は《デッキからＨＥＲＯと名のつくモンスター１体を手札に加える》の効果を発動。俺は《Ｅ・ＨＥＲＯバーストレディ》を手札に加える」

これで切り札が揃った。

「俺は手札の《Ｅ・ＨＥＲＯフェザーマン》と《Ｅ・ＨＥＲＯバーストレディ》を融合！来い《Ｅ・ＨＥＲＯフレイム・ウィングマン》！」

フレイム・ウィングマン　ＡＴＫ２１００

俺のフィールドに白い翼と竜の頭の腕を持ったＨＥＲＯが現れた。

「いくらモンスターを並べテーモ、《古代の機械巨人》には敵わないノーネ」

「まだまだ行くぜ！さらにフィールド魔法《摩天楼―スカイスクレーパー》を発動！」

フィールド上に高層ビル群がそびえ立ち、フレイム・ウィングマンが中央のビルの頂上に佇み、エアーマンはその近くを滞空している。そして手札に来てもらって悪いがハネクリボー、今回はお前の出番はなさそうだ。

【ク、クリィ～】

【落ち込むんじゃないよ。君は僕と違ってそのまま場に出られるじゃないか】

…ユベル、目が笑ってないぞ。チャンスがあれば出してやるから。

「な、なんなノーネ！？」

「ここがＨＥＲＯ達の戦いの舞台だ！このカードは《Ｅ・ＨＥＲＯ》と名のつくモンスターが攻撃する時、攻撃モンスターの攻撃力が相手モンスターの攻撃力よりも低い場合、攻撃力が１０００ポイントアップする。《フレイム・ウィングマン》で《古代の機械巨人》を攻撃！スカイスクレーパーシュート！」

フレイム・ウィングマンＡＴＫ２１００→３１００

《フレイム・ウィングマン》が全身に炎を纏いながら《古代の機械巨人》攻撃して破壊した。

クロノスＬＰ４０００→３９００

「マンママミーア！」

「そして《フレイム・ウィングマン》の効果発動。モンスターを戦闘で破壊した時、そのモンスターの攻撃力分のダメージを相手ライフに与える」

破壊された《古代の機械巨人》が倒れ、先生を下敷きにした。

クロノスＬＰ３９００→９００

「《エアーマン》で直接攻撃だ！」

クロノスＬＰ９００→０

「ガッチャ。楽しいデュエルだったぜ、先生」

先生がものすごく悔しがっている。すると、同じデュエルステージ

で刹那の試験を行うと放送が入った。
次は刹那の番か。あいつが負けるとは思わないけど、応援するぜ！

十代side out

第二話　実技試験　ＶＳ十代（後書き）

感想やアドバイスなどよろしくお願いします。

第三話　実技試験　ＶＳ刹那

刹那ｓｉｄｅ

『受験番号８番、遊城刹那さん、デュエルステージへどうぞ』

十代のデュエルが終わるとすぐに放送が入った。
もう少し余韻に浸っていたかったのに…

「次は刹那の番だな、頑張れよ！」

「もちろん。負けるつもりはないよ」

ステージに向かう途中で十代とすれ違いざまに拳をにぎり、応援にこたえる。
ステージにつくと十代とデュエルした相手が再び構えていた。十代と同じ人が相手か。

「さっきのはまぐれなノーネ。ここで汚名返上させてもらうノーネ」

十代に負けたことがショックだったらしい。だが、私も負けるわけにはいかない。

「デュエル！！」「デュエル」

刹那ＬＰ４０００
クロノスＬＰ４０００

「先行はシニョーラに譲るノーネ」

「ではいきます。私のターン、ドロー。私は魔法カード《スライム増殖炉》を発動。そして、カードを1枚伏せてターンエンド」

刹那ＬＰ４０００
手札：４枚
モンスター：なし
魔法、罠：スライム増殖炉、１枚

―何だあいつ、手札事故でも起こしたのか？
―よりによってこんな時に。
―あの子、運がないわね。

外野がうるさいが無視だ。私のモンスターは一気に化ける。

「フン、さっきのドロップアウトボーイと違ってシニョーラは運がないノーネ。ワタシのターン、ドロー！」

先生はドローしたカードを見るとニヤリと笑った。

「ワタシは《トロイホース》を召カーン」

トロイホースＡＴＫ１６００

「私は罠カード《威嚇する咆哮》を発動。このターン、相手は攻撃宣言することはできない」

「そんなことしても無駄なノーネ。手札から《二重召喚（デュアルサモン）》を発動。このターンワタシはもう一度モンスターを召喚できるノーネ。さらに《トロイホース》の効果発動！地属性モンスターを召喚する時２

体分の生け贄にすることができるノーネ。ワタシは《トロイホース》を生け贄に《古代の機械巨人》を召カーン。カードを1枚伏せてターンエンドなノーネ」

古代の機械巨人　ＡＴＫ３０００

クロノスＬＰ４０００
手札：２枚
モンスター：古代の機械巨人
魔法、罠：１枚

周りの声が一段と大きくなった。まあ、知らない人から見ると絶望的に思えるだろうね。しかし、また1ターン目から《古代の機械巨人》を出すとは。
だけど、もう私の手札には勝利の条件はほとんど揃っている。残るは止めの一押しだけだ。思わず笑みがこぼれる。

「刹那―！行けー！」

【これは決まりかな？】

【……♪】

【……クリ？】

余談だが、私の表情はほとんど変わらないらしく十代とユベル、オドにしか読み取れないそうだ。新入りのハネクリボーが混乱している。

「サレンダーするなら今のうちなノーネ」

「サレンダーはしませんよ。私のターン、ドロー」

…来た。

「《スライム増殖炉》の効果で《スライムトークン》を特殊召喚する」

スライムトークン　ＡＴＫ５００

「私は《スライムトークン》に《下剋上の首飾り》《団結の力》《ジャンク・アタック》を装備。《団結の力》は自分フィールド上の表側表示モンスター１体につき装備モンスターの攻撃力・守備力を８００ポイントアップする。そして、手札から魔法カード《テラ・フォーミング》を発動。デッキからフィールド魔法カードを１枚手札に加える。さらに、フィールド魔法《湿地草原》を発動。このカードはレベル２以下の水族かつ水属性モンスターの攻撃力を１２００ポイントアップする」

スライムトークン　ＡＴＫ５００→１３００→２５００

「いくら装備カードを重ねテーモ、ワタシの《古代の機械巨人》には届かないノーネ（それに伏せカードは《ミラーフォース》なノーネ）」

「私は《サイクロン》を発動。先生の伏せカードを破壊します」

フィールドに風が吹き荒れ、先生のカードを破壊した。《ミラーフォース》だったか…

【……】（刹那、一言いいか？）

（…手短に頼むよ、オド）

【……】（そんな装備で大丈夫か）

（十分だと思うけど。それにもう私の手札は無いし何もできないよ）

質問に答えるとオドはフィールドの隅でいじけはじめた。何なんだ一体。

「…私は《スライムトークン》で《古代の機械巨人》を攻撃」

「攻撃力は《古代の機械巨人》方が上なノーネ。そんなトークンごとき、返り討ちにしてやるノーネ」

「《下剋上の首飾り》の効果発動。装備モンスターが戦闘を行う時、相手モンスターのレベル－自分のレベルの数値×５００ポイント攻撃力をアップする。《古代の機械巨人》のレベルは８、《スライムトークン》のレベルは１、よって３５００ポイントアップする」

スライムトークン　ＡＴＫ２５００→６０００

「攻撃力６０００でスート！？」

スライムトークンが古代の機械巨人に向かって飛んで行き、古代の機械巨人を貫き破壊した。

クロノスＬＰ４０００→１０００

「ペペロンチーノ！？」

「さらに《ジャンク・アタック》の効果発動。装備モンスターが戦闘でモンスターを破壊した時、相手モンスターの攻撃力の半分のダメージを相手ライフに与える」

破壊された古代の機械巨人の破片が先生に降り注ぐ。なぜだろう、つい最近似たような光景を見たような気がする。

クロノスＬＰ１０００→０

「先生、ありがとうございました」

「ありえないノーネ！こんなことあるはずないノーネ！」

騒ぐ先生に一礼をし、フィールドを降りた。

―ありえねぇ！あいつ、トークン１体で勝ちやがった。

―２人揃って１ターンキルだと。何なんだよあいつら。

―フン、まぐれに決まっている。

周りの声を聞きながら十代達の所へ戻ると皆が迎えてくれた。

「やったな刹那！お前ならやれるって信じてたぜ！」

【まあ、当然だね】

【クリクリー♪】

【……】（…あそこは違うだろ…）

「皆、ありがと。オドはいつまで落ち込んでるの。それじゃ私が最後みたいだし、帰ろうか」

さて、結果はどうなるかな？楽しみに待つとしよう。

刹那ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

第三話　実技試験　ＶＳ刹那（後書き）

《下剋上スライム》は５００以上攻撃力を強化すると最強の攻撃力になるので便利でした。
なんでエクシーズはレベルがないんだよぉ…

感想やアドバイスなどよろしくお願いします。

設定

遊城　刹那

性格：大人しめだが、十代の事になると熱くなる

好きな人、事、物：十代、ユベル、ハネクリボー、オド、鍛練、デュエル

嫌いな人、事、物：十代達を傷付ける人、十代をバカにする人、他人を見下す人

使用デッキ：元魔法使い族のトークンデッキ

備考：十代の双子の妹。十代とほぼ同じ外見。セミロング。普段はほぼ無表情で、十代とユベルとオドにしか読み取れない。十代がユベルのカードを持つまで、十代を泣かせた相手をリアルファイトで叩きのめしていた。幼少期はデュエルが弱く、十代に負けていたので昏睡状態にはされなかったがユベルに目の敵にされていた。十代との和解のきっかけを作ったのでユベルとも和解し、親友となる。

オド

性格：負けず嫌いな性格

好きな人、事、物：明るい人、楽しいこと、ゲーム

嫌いな人、事、物：暗い人、つまらないこと

使用デッキ：ゴーレムデッキ

備考：魔法の操り人形（マジカル・マリオネット）の刹那の精霊。一言も喋らないが刹那達は理解できる。本体は後ろの操っている方。実体化はできないが魔力を使って物を動かすことができる。

遊城　十代

性格：基本的に遊戯王ＧＸ初期の十代の性格

好きな人、事、物：刹那、ユベル、ハネクリボー、オド、デュエル

嫌いな人、事、物：カードを大切にしない人、仲間を大切にしない人

使用デッキ：Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）デッキ

備考：デュエルは刹那にメタカードで鍛えられた。睡眠学習が可能で授業は理解できている。試験中もたいていは寝ているが時々刹那に脅されてきちんと受ける。

ユベル

性格：ヤンデレではない

好きな人、事、物：十代、刹那、ハネクリボー、オド、十代達とのデュエル

嫌いな人、事、物：十代を傷付ける人、十代をバカにする人、

使用デッキ：Ｅ－ＨＥＲＯ（イービルヒーロー）デッキ

備考：十代の精霊。モンスターを実体化することができる。自身を実体化させて十代や刹那とたまにデュエルしている。基本的には十代の言うことを聞く。たまに刹那の体を借りて行動する。

設定（後書き）

感想やアドバイスなどよろしくお願いします。

第四話　真夜中のデュエル　ＶＳ万丈目（前書き）

カード効果はＯＣＧのものです。
第四話修正完了しました。

第四話　真夜中のデュエル　VS万丈目

刹那ｓｉｄｅ

私達は2人ともデュエルアカデミアに合格し、今は校長先生の話を聞いている。少し離れた所に並んでいる赤い制服を着た十代は立ったまま寝ている。

所属は十代がオシリスレッドで私がオベリスクブルーだ。十代と同じクラスになりたかったが仕方がない。あ、終わったみたいだ。他の生徒の流れに乗って外に出て十代と合流すると、受験番号1番とメガネ君が先にいた。

「やあ、1番さん。そこの1番君にも言ったが俺は三沢大地。ラーイエローだ。よろしく」

「丸藤翔っす。オシリスレッドっす」

「遊城刹那。よろしく。十代は今から寮に行くんだよね。後で一緒に学園を見て回ろうよ」

「いいぜ。しかし刹那と俺の成績はそんなに変わらないのにクラスは違うんだな」

【…十代、女子は全員オベリスクブルーに入るって書いてたよ】

ユベルが額に手を当てつぶやく。ファイト、ユベル。

「まあね。それじゃ、また後で」

少しでも早く十代と行動するため、急いでオベリスクブルーの寮へと向かった。

＊　＊　＊

「…どこの城だよ、ここは」

目の前にそびえ立つ寮を見て思わずつぶやいた。これを見て寮だと分かる人はいないだろう。

【……】（エリートと女子のための優遇と言ったところか…）

しばし呆然としていたがオドの言葉で我に返り、自分の部屋へと向かった。

＊　＊　＊

荷物を整理し終え、十代と合流するために学園内を歩いている。十代と待ち合わせはしていないが、双子のシンクロ率をなめるな。

「…右」

適当に進んでいくとデュエル場に出て、十代達を見つけた。何やらオベリスクブルーの男子と言い争っているらしい。

「十代、どういう状況？」

「刹那！いいところに来たな。俺とここでデュエルしようぜ」

「ここはオベリスクブルー専用のデュエルリングだと言っているだろ！オシリスレッドのドロップアウトは帰れ！」

「…なるほど、だいたい理解した」

ブルーの私が相手でもレッドの十代は使うなということか。しかし、このブルーの生徒は嫌いだな。他人を見下している感じで。何だかイライラしてきた。

「お前達、何を騒いでいる」

「ま、万丈目さん」

ブルーの生徒を睨みつけていると声がかかった。

「こいつらはまぐれとはいえクロノス先生に勝った連中じゃないか」

こいつ、十代のデュエルをまぐれと言ったな…。私の方は否定しないけど、許せないな。

「まぐれじゃないぜ。実力さ」

「その実力、見せてもらいたいものだな」

「いいぜ。デュエルだ！」

「あなた達、何をしているの！」

「て、天上院君」

十代達がデュエルディスクを構えると新たな声がかかった。

「そろそろ歓迎会が始まる時間よ」

「ちっ、行くぞお前達」

「「はい！」」

あいつは取り巻き共を引き連れて去って行った。

「あなた達、万丈目君の挑発に乗っちゃ駄目よ。あいつらろくでもない連中だから」

「分かった。忠告ありがとな」

「あなた達が遊城十代と遊城刹那ね。私は天上院明日香よ。明日香でいいわ」

「俺は十代でいいぜ」

「刹那でいいです」

「僕は丸藤翔っす」

「あなた達の寮でも歓迎会が始まるんじゃないかしら？」

「そうだったっす。アニキ、早く帰らないと始まっちゃうっす」
「そうだな。2人とも、また今度な」
十代達が帰っていった。もう少し一緒にいたかったのに…。
「私達も戻りましょう」
「…はい」
2人並んで歩いていると声をかけられた。
「それにしてもあなた、珍しいデッキを使うのね。トークンがエースのデッキなんて初めて見たわ」
「…エースはトークンじゃないです」
答えると少し驚かれた。まあ、オドは出なかったしね。
「そうなの。それと敬語はいいわよ。だけど、あんな勝ち方をしたからそう思ったわ」
「まあ、勝ち方の1つではあるけどね」
もっとも、他の勝ち方も似たようなものだけど。

＊　＊　＊

ブルーの歓迎会は一言でいうと豪勢だった。寮の外見から予想はしていたが、やっぱり落ち着かない。

歓迎会が終わり部屋に戻ると、オドが荷物からゲームを引っ張り出して始めた。

以前、何故そんなにゲームが好きなのか聞くと「自分は人形使いだから。人形（キャラクター）を操ることでは誰にも負けるわけにはいかない」と答えになるような、ならないようなことを言われた。

…一度格闘ゲームでこてんぱんにされたことが悔しかったらしい。

「オド、ほどほどにするんだよ」

【……】（了解）

＊　＊　＊

寝る準備をしているとＰＤＡに十代からのメールが入った。

０時に昼間のデュエルリングであいつとデュエルするらしい。あいつは気に食わないけど、十代のデュエルは好きだから見に行こう。

十代は校則とか見てないだろうし、ガードマンの見張りもかねてね。

刹那ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

十代ｓｉｄｅ

歓迎会が終わって部屋に戻るとＰＤＡに万丈目からデュエルの呼び

出しのメールが入った。ベストカードを賭けたアンティルールだけど断る理由なんかないし、あいつがどんなデュエルをするのか興味があるから行くぜ。
刹那は俺のデュエルを見るのが好きだから、黙ってたら後が怖い。
すぐに刹那にメールを送ることにした。

「アニキ、僕も行っていいっすか？」

「いいぜ。行こう」

＊　＊　＊

翔とデュエルリングに着くと万丈目達と刹那が先にいた。

「フン、逃げ出さなかったことだけは褒めてやる。アンティルールだ。負けた方がベストカードを渡してもらおう」

「十代、頑張って」

「よっしゃー！行くぜ万丈目！」

「万丈目さんだ！」

「「デュエル！」」

十代ＬＰ４０００
万丈目ＬＰ４０００

「俺の先攻だ。ドロー！」

そういやこいつ、俺が先生に勝ったことを知っていたな。てことは俺が融合を使うことを知っているかもしれないな。対策はしておくか。

「俺は《Ｅ・ＨＥＲＯスパークマン》を召喚。カードを１枚伏せてターンエンドだ」

スパークマン　ＡＴＫ１６００

十代ＬＰ４０００
手札：４枚
モンスター：スパークマン
魔法、罠：１枚

「俺のターンドロー。俺は「こんな時間に何をしているの！」て、天上院君」

万丈目がドローすると明日香が入ってきた。

「明日香、どうしてここにいるの？」

「あなたが寮を出るのを見かけたからよ」

「天上院君、今からこのレッドに学園の厳しさを教えてやるから、君はそこで見ていてたまえ。俺は《地獄戦士（ヘルソルジャー）》を召喚。カードを３枚伏せてターンエンドだ」

地獄戦士　ＡＴＫ１２００

万丈目ＬＰ４０００
手札：２枚
モンスター：地獄戦士
魔法、罠：３枚

「俺のターン、ドロー。俺は手札から《沼地の魔神王》を墓地へ捨て、デッキから《融合》を手札に加える。そして手札の《Ｅ・ＨＥＲＯフェザーマン》と《バーストレディ》を融合。来い！《フレイム・ウィングマン》！」

フレイム・ウィングマン　ＡＴＫ２１００

「掛かったな！罠カード《ヘル・ポリマー》を発動！自分フィールド上のモンスター１体を墓地に送り、相手が召喚した融合モンスターのコントロールを得る。貴様の《フレイム・ウィングマン》をもらうぞ」

《地獄戦士》がフィールドからいなくなり、《フレイム・ウィングマン》が万丈目のフィールドに移る。
モンスター奪取のカードか、だが！

「まだまだ行くぜ！俺は手札から《ミラクル・フュージョン》を発動！墓地の《フェザーマン》と《バーストレディ》を除外し、現れろ！《Ｅ・ＨＥＲＯノヴァマスター》！」

俺の場にフレイム・ウィングマンとは別の、紅い鎧とマントを纏った炎のＨＥＲＯが現れた。

ノヴァマスター　ＡＴＫ２６００

「2度目の融合だと！？」

「《ノヴァマスター》で《フレイム・ウィングマン》を攻撃！」

万丈目ＬＰ４０００→３５００

「くっ、罠カード《ヘル・ブラスト》を発動！自分フィールド上の表側表示モンスターが破壊され墓地へ送られた時、攻撃力が１番低いモンスターを破壊し、お互いにその攻撃力の半分のダメージを受ける。《スパークマン》を破壊し、８００ポイントのダメージだ！」

万丈目ＬＰ３５００→２７００

十代ＬＰ４０００→３２００

「《ノヴァマスター》の効果発動。戦闘でモンスターを破壊した時カードを1枚ドローする。ターンエンドだ」

十代ＬＰ３２００
手札：２枚
モンスター：ノヴァマスター
魔法、罠：１枚

「俺のターン、ドロー！俺は罠カード《リビングデッドの呼び声》を発動。《地獄戦士》を特殊召喚する。そして手札から速攻魔法《地獄の暴走召喚》を発動！攻撃力１５００以下のモンスターを特殊召喚した時、同じモンスターを手札・デッキ・墓地から全て特殊召喚する。相手は自分フィールド上に存在するモンスターを1体選択し、特殊召喚する」

「ノヴァマスターは融合モンスターだから、デッキには存在しない」
「俺は《地獄戦士》を2体特殊召喚する。そして2体の《地獄戦士》を生け贄に、現れよ！《地獄の傀儡魔人》！」
地獄戦士　ＡＴＫ１２００
地獄の傀儡魔人　ＡＴＫ２７００
「《地獄の傀儡魔人》で《ノヴァマスター》を攻撃！」
「罠カード《異次元トンネル―ミラーゲート―》発動！《地獄の傀儡魔人》と《ノヴァマスター》を入れ替えてバトルし、エンドフェイズまでコントロールを得るぜ！」
「何だと！くっ」
万丈目ＬＰ２７００→２６００
「俺はターンエンドだ。だが《地獄の傀儡魔人》は俺のフィールドに戻る。貴様の場はがら空きだ！もう諦めた方がいいぞ」
万丈目ＬＰ２６００
手札：１枚
モンスター：地獄戦士、地獄の傀儡魔人
魔法、罠：無し
「それはどうかな？俺のデッキには次のターンでお前を倒せるカードが眠っている。次のターン、そのカードを引いたら面白いと思わ

ないか？」

「馬鹿なことを言うな！そんな偶然あるわけないだろう！」

「俺はデッキを信じるぜ！俺のターン、ドロー！」

来た！

「ガードマンが来るわ！時間外の施設利用もアンティルールも校則違反よ！ばれたら退学になるかもしれないわ！」

へえ、そんな校則あったのか。ってか、何でこのタイミング！？

「何だと！くそっ、デュエルはここまでだ。お前ら行くぞ！」

「「はい！」」

「あっ。おい待てよ、デュエルはまだ終わってないぞ！」

「アニキ、早く逃げるっす！」

「…やだ！俺はここを動かない！」

【わがまま言うんじゃないよ、十代！】

【クリ！】

「十代、…来い」

十代ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

明日香ｓｉｄｅ

十代がわがままを言って一時はどうなるかと思ったけど、刹那の一言で大人しくなったから助かったわ。

「どうだったかしら、オベリスクブルーの洗礼は？」

「大したことなかった」

「惜しかったね、十代」

「？危なかったように見えたけど」

「最後に引いたカードは何だったんすか？アニキ」

「へへっ、これさ！」

そう言って十代は最後に引いたカード、《平行世界融合（パラレル・ワールド・フュージョン）》を見せた。また融合カード…一体何枚入れているのかしら？

「こいつで《フェザーマン》と《バーストレディ》を融合して、相手の全てのモンスターの攻撃力を半分にする《Ｇｒｅａｔ　ＴＯＲＮＡＤＯ》を召喚。手札から《ザ・ヒート》を召喚して攻撃してたら俺の勝ちだ！」

まさかあのタイミングでキーカードを引くなんて、面白い子ね。

「じゃあ翔、戻るか。２人ともまた明日な」

「はいっす。おやすみっす」

「おやすみ、十代、翔」

「おやすみなさい」

十代達が帰っていった、私達も戻りましょう。

明日香ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

第四話　真夜中のデュエル　ＶＳ万丈目（後書き）

感想やアドバイスなどよろしくお願いします。

第五話　偽ラブレター事件　昼（前書き）

ほぼ回想回。

第五話　偽ラブレター事件　昼

翔ｓｉｄｅ

デュエルアカデミアの入学から少したって、今授業を受けているんすけど…

「シニョール翔、フィールド魔法について説明するノーネ」

「えっと、フィールド魔法は、その…」

「分からないならもういいノーネ。これだからオシリスレッドはドロップアウトなノーネ」

落ち着けばちゃんと言えるはずなのに、やっぱり僕はダメだなあ。隣にいるアニキは食い入るように教科書を覗き込んでるし、僕とアニキじゃ姿勢が違うんすね。

「それデ～ハ、同じ質問を次はドロップアウトボーイが答えるノーネ」

あ、アニキが当てられたっす。クロノス先生はアニキのことをドロップアウトボーイって呼んでるっす。でも、アニキは教科書を覗き込んだまま微動だにしない。
そんなに集中してるのかな？

「アニキ、当てられたっすよ？」

声をかけると、アニキが読んでいた教科書がゆっくりと倒れ、教室

に音が響いた。
そしてアニキは…寝ていた。
ブチッていう音が聞こえたと思ったら
「ちゃんと授業を聞くノーネ！！」
チョークが飛んできた。
チョークがアニキに当たるかと思ったら、どこからか消しゴムが飛んできてチョークを撃ち落とした。
…つか、消しゴムってあんなに速く飛ぶものなんすか！？
あ、アニキが起きたみたいっす。
「ドロップアウトボーイ、質問に答えるノーネ」
そんな、無理だよ。今まで寝ていたアニキが分かる訳ないじゃないか。
そう思っていたのにアニキはスラスラと流れるように答え、クロノス先生にストップをかけられるまで続いた。
…なんで質問が分かるんすか？
「あ、それと俺、オシリスレッドだけど試験で先生に勝っちゃったし？」
アニキの言葉にクロノス先生が悔しがり、笑いが起こる。
するとさっきと同じ方向から消しゴムがすごいスピードでアニキに向かって飛んできた。
アニキが前を向いたまま片手でそれをキャッチしたのは気のせいに

違いないっす！

翔ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

十代ｓｉｄｅ

「刹那～。なんで俺に消しゴム投げんだよ？」

「最後の一言は余計。言う必要はなかった」

皆と一緒に購買で買ったドローパンを食べている。俺はもちろん黄金の卵パンだ。入学してから当て続けているんだけど、この前オドに「お前はバグキャラか？」と言われた。言ってはいないが。

「でもアニキ寝てたんじゃないんすか？」

「ああ！でも授業は聞いてるぜ」

「…器用なんすね」

「いろいろあったんだよ…」

＊＊＊

「十代、これは何？」

俺の目の前には採点済みのテストが置かれていて、テストには赤で丸が書かれている。
ただし、解答欄ではなく右上に。２つではなく１つだ。
「十代、努力してこの点なら勉強を教えようと思うけど、なんで解答した跡すらないの？」
「寝てた」
刹那の纏う空気が変わった。
「だってよ～、放課後のデュエルを全力でしたいから、そのための睡眠だぜ？」
「初めから寝たの？」
「…今回は名前は書いたぜ」
「ユベルも起こさなかったの？」
【愚問だね、刹那。十代の寝顔を見るのは最高の生きがいじゃないか】
「それもそうだね」
昔はユベルが刹那を邪険に扱っていたのに、今じゃ本当に仲がいいよな。
「でもこのままじゃ十代が馬鹿にされるかもしれないし、来年デュエルアカデミアに入れないかもしれないよ」

「大丈夫！実技で勝つから！」

【問題は十代が馬鹿にされるかもしれないということだよ】

「そうだよ。馬鹿にした奴が出たら、締め上げなくちゃ」

…2人とも少し過保護な所があるんだよな。これでも昔より随分ましになったんだけど、似た者同士だなあ。それと刹那、締め上げるな。

まあ、今では2人とも実行には移さなくなったし、冗談だってわかるけどな。

「む、そうだ十代。十代にぴったりの勉強法、思いついた」

何かを考えていた刹那が声を上げた。

「十代が間違えた問題の数だけ、私のデッキに十代のデッキのメタカードを入れて休憩中にデュエルする。デュエルも強くなるし、一石二鳥だよ」

よかった。たくさん間違えたらデュエル禁止とかじゃなくて。

「《虚無魔人（ヴァニティー・デビル）》で《フォレストマン》を攻撃」

「《ヒーローバリア》を発動！」

融合ができない…

今の状況は刹那の場に特殊召喚を封じる《虚無魔人》、俺の場に《フォレストマン》がいる。
デュエルはまず俺の先攻で《フォレストマン》を召喚し、1枚伏せてターンエンド。刹那のターンで特殊召喚した《ＴＨＥトリッキー》を生け贄に《虚無魔人》を召喚。攻撃された《フォレストマン》を守ったところだ。
早くあのモンスターを何とかしなくちゃ。

「カードを1枚伏せて、ターンエンド」

「俺のターン、ドロー！」

よし！

「《フォレストマン》の効果発動！デッキから《融合》を1枚手札に加える。そして魔法カード《月の書》を発動！《虚無魔人》に裏守備表示になってもらうぜ！手札の《レディ・オブ・ファイア》と場の《フォレストマン》を融合！来い《ノヴァマスター》！」

「罠カード《融合失敗》を発動。《ノヴァマスター》を融合デッキに戻してもらうよ」

「な！？待った！！」

「やだ」

その後のデュエルも《ヘル・ポリマー》で融合モンスターを奪われ

たり、《融合禁止エリア》で融合を封じられたり、《成功確率０％》で融合モンスターを墓地に送られたりした。
何とか勝っていたが…
でもさすがにきついから授業は聞くことにした。寝ながらだけどな。

そして、筆記試験前日…

「十代、明日は最後まで寝ないでよ」

「おう！大丈夫だって」

だけど刹那は考え込んでしまった。前の模試は半分で寝たけど、解いた所はほとんどあっていたじゃねーか。

「そうだ十代、おまじないをしよう」

「おまじない？」

すると刹那は「十代のため、十代のため」とつぶやきながらリンゴを持ってきた。

「十代、プロレスには《アイアンクロー》って言って、握力で頭部を締める技があるんだよ」

「？それがどうしたんだ？」

グシャッ

砕けた、リンゴが、片手で、刹那が、

「明日の試験、頑張ろう」

＊＊＊

「あれはおまじないじゃねー！！」

「うわ！？いきなりどうしたんすか、アニキ」

「いや、悪い。何でもない」

「そうっすか」

余計なことまで思い出しちまった。まあ、たしかに試験中眠くなると砕け散るリンゴが脳裏に浮かんで眠気が飛んだけど、他に方法があっただろ。

「アニキ、次の授業が始まるっすよ」

「もうそんな時間か。行こうぜ」

次は体育か。ちょうどいい、体を動かして気分を変えよう！

十代ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

第五話　偽ラブレター事件　昼（後書き）

感想やアドバイスなどよろしくお願いします。

第六話　偽ラブレター事件　VS明日香

刹那ｓｉｄｅ

１日の授業が終わり、今は女子寮の風呂に入っている。
しかし、風呂も大きすぎる。ここまで大きくする必要はあるのか？
ん？近くにいた明日香達が十代の話をしている。
…十代とレッドのどこがダメなんだ。明日香じゃない２人。
前にレッド寮に行ったけど風情があっていいところで、その時《デス・コアラ》によく似た、十代のルームメイトの隼人を紹介してもらった。

少し殺気を出していると明日香がこちらに気付いた。

「あら？刹那じゃない。こんなところで奇遇ね」

「あ、明日香さん。さっき突然寒くなったんですけど」

「わ、私も。あら？あなた確か遊城十代の…」

「遊城刹那。よろしく」

殺気を抑えて話をしていると外が騒がしくなり、明日香達と一緒に様子を見に行くことになった。

＊＊＊

外に出ると翔が取り押さえられていた。

「何の騒ぎなの？」

「あ、明日香さん！こいつ覗きをしたんです！」

「だから覗いてないって！」

話を聞くと翔は明日香に呼び出されてここに来たらしいが、そのラブレターはミミズがのた打ち回ったような文字で書かれていたし、宛名は十代だった。

「明日香さん、こいつどうします？」

「学園に報告しましょうよ」

「そんな…」

「翔、あなたは十代の友達だから信じるよ」

「せ、刹那さん…！」

翔が希望に満ちた目で私を見つめる。

「だから安心して罰を受けなさい」

「え？庇ってくれるんじゃないんすか！？」

「ごめん。信じるけど、庇える証拠がない。でも、あなたが覗きをしてないって信じるから」

【……】（お前…たまに酷いぞ…）

寮長の鮎川先生が様子を見に来たが、明日香達の機転で翔を隠すことができた。

明日香が十代とデュエルしたいらしく、翔を使って十代を呼ぶことになった。

刹那ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

十代ｓｉｄｅ

翔がさらわれたらしく、ボートで女子寮に向かっている。

女子寮に着くと翔と明日香達と刹那がいた。

「刹那？翔が何をしたんだ？」

「こいつ覗きをしたのよ！」

「だから覗いてないって！」

【刹那、詳しく教えてくれるかい？】

「偽ラブレターにおびき出されたメガネがひとり」

「なるほど。昼間、翔の様子がおかしかったのはそういうことか」

だけど、なんで俺を呼び出したんだ？

「遊城十代、私とデュエルをしなさい。あなたが勝てば彼を返すわ。そのかわり、私が勝てばこのことを学園に報告するわよ」

そういうことか。

「わかった。デュエルだ」

翔をボートの後ろに乗せて湖の上に行く。

そういえば明日香のデュエルって見たことないな。

「「デュエル！」」

明日香ＬＰ４０００
十代ＬＰ４０００

「私の先攻、ドロー！私は《エトワール・サイバー》を召喚。カードを２枚伏せて、ターンエンド」

エトワール・サイバー　ＡＴＫ１２００

明日香ＬＰ４０００
手札：３枚
モンスター：エトワール・サイバー
魔法、罠：２枚

「俺のターン、ドロー！俺は《Ｅ・ＨＥＲＯワイルドマン》を召喚

！」

ワイルドマン　ＡＴＫ１５００

「《ワイルドマン》で《エトワール・サイバー》を攻撃！ワイルド・スラッシュ！《ワイルドマン》は罠の効果を受けないぜ！」

ワイルドマンが背負っていた大剣を構えてエトワール・サイバーに向かっていく。

「甘いわよ！永続罠《アストラルバリア》を発動！相手モンスターが自分フィールド上のモンスターを攻撃する場合、その攻撃を直接攻撃にする！モンスターを対象に取らないから《ワイルドマン》の効果は発動しないわ！」

ワイルドマンの攻撃がそれ、明日香に向かっていく。

「そして永続罠《スピリットバリア》発動！自分フィールド上にモンスターが存在する限り、私への戦闘ダメージを０にするわ！」

明日香に当たるかと思った攻撃はバリアに阻まれ、消滅した。

「明日香さんのバリアがきまりましたわ！」

「これであいつは明日香さんにダメージを与えられない！」

モンスターを攻撃することも、ダメージを与えることもできなくなったか。でも！

「魔法カード《ＨＥＲＯ、Ｓボンド》を発動！場に《ＨＥＲＯ》と

名のついたモンスターが存在する時、手札からレベル４以下の《Ｅ・ＨＥＲＯ》と名のつくモンスターを２体特殊召喚するぜ。俺は《アイスエッジ》と《レディ・オブ・ファイア》を特殊召喚！」

アイスエッジ　ＡＴＫ８００

レディ・オブ・ファイア　ＡＴＫ１３００

「カードを１枚伏せて、ターンエンド。そして《レディ・オブ・ファイア》の効果発動！自分のエンドフェイズに《Ｅ・ＨＥＲＯ》と名のつくモンスターの数×２００ポイント、つまり６００ポイントのダメージを受けてもらう！効果ダメージだから《スピリットバリア》の効果は発動しないぜ！」

レディ・オブ・ファイアの周りに３つの火の玉が現れ、明日香を攻撃した。

明日香ＬＰ４０００→３４００

十代ＬＰ４０００
手札：１枚
モンスター：ワイルドマン、アイスエッジ、レディ・オブ・ファイア
魔法、罠：１枚

「私のターン、ドロー！私は《サイバー・チュチュ》を召喚するわ」

サイバー・チュチュ　ＡＴＫ１０００

「そして場の《エトワール・サイバー》と手札の《ブレード・スケーター》を融合！現れよ、《サイバー・ブレイダー》！」

サイバー・ブレイダー　ＡＴＫ２１００

「バトル！《サイバー・チュチュ》で《アイスエッジ》を攻撃！ヌーベル・ポアント！」

ここは通すか…

十代ＬＰ４０００→３８００

「そして《サイバー・ブレイダー》の効果発動！相手のモンスターが２体の場合、攻撃力は倍になる！」

サイバー・ブレイダー　ＡＴＫ２１００→４２００

「《サイバー・ブレイダー》で《レディ・オブ・ファイア》を攻撃！グリッサード・スラッシュ！」

サイバー・ブレイダーが回転しながらレディ・オブ・ファイアに近づく。

「罠カード《ドレインシールド》発動！攻撃を無効にし、その攻撃力分俺のライフを回復するぜ！」

レディ・オブ・ファイアと俺を包み込むようにバリアが現れ、サイバー・ブレイダーの攻撃を止めた。

十代ＬＰ３８００→８０００

…ライフが初期ライフの倍になったな。

「っ！私はターンエンドよ」

明日香ＬＰ３４００
手札：１枚
モンスター：サイバー・チュチュ、サイバー・ブレイダー
魔法、罠：アストラルバリア、スピリットバリア

「俺のターン、ドロー！明日香、このデュエル俺の勝ちだぜ」

「まだ私のライフは３０００以上あるのよ？」

「いくぜ！俺は魔法カード《Ｒ－ライトジャスティス》を発動！俺のフィールド上の《Ｅ・ＨＥＲＯ》の数だけフィールド上の魔法、罠カードを破壊する！《アストラルバリア》と《スピリットバリア》を破壊するぜ！」

アストラルバリアとスピリットバリアが破壊された。

「明日香さんのバリアが！」

「やったっす！アニキ！」

「そして魔法カード《ミラクル・フュージョン》を発動！場の《ワイルドマン》と墓地の《アイスエッジ》を除外し、来い！《Ｅ・ＨＥＲＯガイア》！」

俺の場に漆黒の巨大な大地のＨＥＲＯが現れた。

ガイア　ＡＴＫ２２００

「《ガイア》の効果発動！このカードが融合召喚に成功した時、このターンのエンドフェイズまで相手モンスター１体の攻撃力を半分にし、その分《ガイア》の攻撃力を上げる。俺は《サイバー・ブレイダー》を選択するぜ！」

サイバー・ブレイダー　ＡＴＫ４２００→２１００

ガイア　ＡＴＫ２２００→４３００

「《ガイア》で《サイバー・チュチュ》を攻撃！コンチネンタルハンマー！」

ガイアが巨大な拳をサイバー・チュチュに振り下ろすと巨大な水柱ができ、水面を大きく揺らした。

明日香ＬＰ３４００→１００

「「きゃー！！」」

「うわー！！」

「ア～レ～！！」

…なんか俺達以外の悲鳴が聞こえたような。

ありえないよな、ここ湖の真ん中だし。

「ちょっと！！何するのよ！！」

「アニキ！！」

「わ、わりい」

俺だってこんな風になるなんて思わなかったんだよ！！

「くっ。だけどこのターン、あなたはもう何もできないんじゃないの？」

「ああその通り、ターンエンドだ。だが忘れるなよ！《レディ・オブ・ファイア》の効果発動！俺の場には《Ｅ・ＨＥＲＯ》が２体。４００ポイントのダメージだ！」

レディ・オブ・ファイアが２つの火の玉を操り、明日香へと飛ばした。

明日香ＬＰ１００→０

「そんな…！」

「ガッチャ！楽しいデュエルだったぜ！」

「やったね、十代」

俺達はいったん陸に戻ることになった。

「じゃあ、翔は返してもらうぜ」

「ま、まぐれで勝ったからっていい気にならないでよね！」

「ジュンコ、負けは負けよ」

「アニキ～。助かったっす～」

「十代、かっこよかったよ」

「へへっ。それじゃ、俺達は帰るぜ」

しかし、偽ラブレターを書いたのは誰だったんだ？
まあいいか。おかげで明日香とデュエルできたし。
もう遅いし、俺達は急いで寮に戻ることにした。

十代ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

第六話　偽ラブレター事件　ＶＳ明日香（後書き）

感想やアドバイスなどよろしくお願いします。

第七話　月一試験　ＶＳ刹那（前書き）

今回は使いませんが、一部のカードをアニメ効果で使うことにしました。

第七話　月一試験　VS刹那

刹那side

今日は月に1度の試験の日。みんな必死に問題を解いているが、教室のどこにも十代がいない。

翔に聞こうかと思ったけど、翔が来てすぐに試験が始まった。

翔の様子を見るに病気とかではないようだ。

…寝てるのか？

試験終了10分前になってようやく十代が来た。

ひとしきり翔と騒いだ後、解答用紙を受け取ってすぐに眠りはじめた。

まあ、今からじゃこの問題数を解くのは無理だから仕方ないか。

＊＊＊

試験が終わると皆が急に走り出した。

「あれ？刹那、みんな急にどうしたんだ？」

本当に何も聞いていなかったようで、十代が疑問の声を上げる。

「アニキ知らないんすか？午後から購買で新パックが発売されるんすよ」

「本当か！？刹那、翔、俺達も見に行こうぜ！」

「うん」「はいっす！」

＊＊＊

スタートが出遅れたから少なくなっているとは思っていたけど、まさか買い占めた人がいたなんてね。

「あーあ。新パック、一目見たかったぜ」

「残念だったっすね、アニキ」

「ま、いっか。俺は俺のデッキを信じているからな」

「デッキの補強したかったのになぁ…」

「…十代、１つだけ残っているよ」

「あ、本当だ！…翔、お前が買えよ」

「いいんすか！？アニキ！」

「いいって、いいって。それじゃ、デッキの調整に行こうぜ！」

「あ、ちょいとあんた」

十代と話をしていると、購買のおばちゃんが話しかけてきた。

「あ、今朝のおばちゃん。購買のおばちゃんだったのか」
「おばちゃんじゃなくてトメだよ。今朝はありがとね。お礼に受け取っておくれ、1つだけとっといたんだよ」
そう言ってトメさんはカードのパックを差し出す。
「これ新パックっすよ、アニキ！」
「やったー！ありがとうトメさん！」
本当に嬉しそうだね十代。いいカードも入っていたみたいだし、本当に良かった。

＊＊＊

午後からは実技試験でデュエルを行っている。次は私の番だ。
「頑張れよ刹那！」
「頑張ってくださいっす」
【頑張るんだよ】
【クリクリ～】
「行ってくるよ」

皆の声援を受けてデュエルリングに上がると相手は先に待っていた。
相手は明日香とよく一緒にいるももえだ。

「そういえば、あなたとデュエルするのは初めてですわね」

「そうだね。始めよう」

「デュエル！」「デュエル」

ももえＬＰ４０００
刹那ＬＰ４０００

「私のターン、ドロー！私は《素早いモモンガ》を召喚しますわ！」

素早いモモンガ　ＡＴＫ１０００

「そして永続魔法《黒蛇病》を発動！私のスタンバイフェイズ毎にお互いに２００ポイントのダメージを受け、その次のターンからのダメージは倍になりますわ！カードを１枚伏せて、ターンエンド」

ももえＬＰ４０００
手札：３枚
モンスター：素早いモモンガ
魔法、罠：黒蛇病、１枚

「私のターン、ドロー」

…久々に始めから闘えるね。一緒に闘おう。

「私は魔法カード《デビルズ・サンクチュアリ》を発動。《メタルデビル・トークン》を特殊召喚。《メタルデビル・トークン》を生け贄に、現れよ《魔法の操り人形（マジカル・マリオネット）》」

私の場に幼い頃からの相棒、赤いマントを纏った仮面の操り人形師が現れた。

魔法の操り人形　ＡＴＫ２０００

【……】（刹那、パートナーを呼ぶときくらいは十代のようにテンションを上げたらどうだ？）

（出来ないことはないけど、生まれつきだから仕方ない）

【……】（そうか…）

オド、何を落ち込んでいるんだ？

刹那ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

十代ｓｉｄｅ

「来たー！刹那のエース！」

オドは始めに出すほど効果を発揮するから幸先がいいぜ！

「あれが刹那さんのエースなんすか？何か…普通っす」

「そうね、エースはトークンじゃないとは聞いていたけど、関わりすらないなんて…」

いつの間にか明日香が来ていた。

「そんなこと言うなよ。あいつは刹那がトークンデッキを作る前からのパートナーだからな。…というよりあいつを軸にトークンデッキを作ったからな」

「えっ、どういうことなんすか？」

「まあ見てなって」

＊＊＊

「私は永続罠《グラヴィティ・バインド―超重力の網―》を発動しますわ！フィールド上のレベル４以上のモンスターは攻撃できませんわよ！」

「カードを３枚伏せて、ターンエンド」

刹那ＬＰ４０００
手札：１枚
モンスター：魔法の操り人形
魔法、罠：３枚

「私のターン、ドロー！《黒蛇病》の効果でお互いに２００ポイントのダメージですわ」

ももえＬＰ４０００→３８００

刹那ＬＰ４０００→３８００

「私は《ラッコアラ》を召喚しますわ」

ラッコアラ　ＡＴＫ１２００

「《ラッコアラ》の効果発動！自分フィールド上に他の獣族モンスターが存在する時、モンスター１体の攻撃力を１０００ポイントアップします。《素早いモモンガ》の攻撃力を上げますわ！」

素早いモモンガ　ＡＴＫ１０００→２０００

「《素早いモモンガ》で《魔法の操り人形》を攻撃ですわ！」

パワーアップしたモモンガがオドに特攻をしかける。

「永続罠《死の演算盤（デス・カリキュレーター）》発動。フィールド上のモンスターが墓地に行くたび、プレイヤーは５００ポイントのダメージを受ける」

「でも、それだとあなたもダメージを受けてしまいますわよ？」

このままではそうだ。だが、

「速攻魔法《スケープゴート》を発動。《羊トークン》を４体特殊召喚する」

羊トークン　ＤＥＦ０

「そして《魔法の操り人形》の効果発動。魔法カードが発動した時、魔力カウンターを１つ乗せる。そして《魔法の操り人形》は魔力カウンター１つにつき２００ポイント攻撃力がアップする」

《スケープゴート》のカードから光の球が出てきてオドの近くに浮かんだ。

魔法の操り人形
　魔力カウンター０→１
　ＡＴＫ２０００→２２００

「かまいませんわ！攻撃を続行しますわ！」

「そうはさせない。罠カード《はさみ撃ち》を発動。自分フィールド上のモンスター２体を破壊して、相手モンスター１体を破壊する。《羊トークン》２体を破壊して《素早いモモンガ》を破壊」

カラフルな４匹の羊のうちの２匹が、飛んでいるモモンガを両側から体当たりして破壊した。

＊＊＊

「いいぞー！刹那ー！」

「何言ってるんすかアニキ！《死の演算盤》の効果で刹那さん、１０００ポイントのダメージっすよ！」

ももえＬＰ３８００→３３００

刹那ＬＰ３８００

「あれ？何でライフが減ってないんすか？」

「トークンの特性だな」

「あっ、お前…

…

…三沢？」

「…何で疑問形なんだ？」

なんか…久しぶりに見たな…

「三沢君、どういうことっすか？」

「ああ。トークンは通常モンスターとして扱われるが、破壊されたら消滅するんだ」

「消滅？」

「トークンはモンスターであってモンスターでないってことだ。墓地に行かないから《死の演算盤》の効果は発動しない」

つか、普段はほとんどトークンしか召喚しないから刹那に対して効果が発動することもないけどな。

＊＊＊

「戦闘破壊されなかったから《素早いモモンガ》の効果は発動しない」

「でも、私の攻撃はまだ終わってませんわ！《ラッコアラ》で《羊トークン》を攻撃ですわ！カードを1枚伏せて、ターンエンド」

ももえＬＰ３３００
手札：２枚
モンスター：ラッコアラ
魔法、罠：黒蛇病、グラヴィティ・バインド、１枚

「私のターン、ドロー。魔法カード《闇の誘惑》を発動。２枚ドローして、手札の闇属性モンスター1体を除外。《魔法の操り人形》に魔力カウンターを１つ乗せる」

魔法の操り人形
　魔力カウンター１→２
ＡＴＫ２２００→２４００

「…このターンで終わらせる」

いいカードが来たみたいだな。

「《魔法の操り人形》の効果発動。魔力カウンター２つを取り除くことで相手モンスター１体を破壊する。魔力カウンターを２つ取り除き《ラッコアラ》を破壊。《死の演算盤》の効果で５００ポイントのダメージを与える」

オドの周りを漂う２つの光の球が１つに合わさると、さらに強い輝きを放ちながらモンスターに向かって飛んで行き、破壊した。

魔法の操り人形
　魔力カウンター２→０
　ＡＴＫ２４００→２０００

ももえＬＰ３３００→２８００

「魔法カード《大嵐》発動。フィールド上の魔法、罠を全て破壊する」

ももえが伏せていたのは《ミラーフォース》だったか。これで場はがら空きになった。

魔法の操り人形
　魔力カウンター０→１
　ＡＴＫ２０００→２２００

「魔法カード《アームズ・ホール》を発動。デッキの１番上のカードを墓地に送り、装備魔法カードをデッキから手札に加える。さら

に装備魔法《団結の力》を《魔法の操り人形》に装備。《団結の力》は自分フィールド上のモンスター1体につき、装備モンスターの攻撃力を８００ポイントアップさせる。私の場にモンスターは2体。よって１６００ポイントアップする。魔法カードが発動されたことにより《魔法の操り人形》に魔力カウンターを合計２つ乗せる」

魔法の操り人形
　魔力カウンター１→３
　ＡＴＫ２２００→３８００→４２００

「攻撃力４２００！？」

「《魔法の操り人形》で直接攻撃」

オドが手を動かすと、両手に剣を持った人形がももえに向かって飛んで行き、斬りつけた。

「きゃー！」

ももえＬＰ２８００→０

刹那の勝ちだ！

「アニキ、もしかして刹那さんは魔法カードをたくさん使うためにトークンデッキをつくったんすか？」

「最初はな。もっとも、あいつを出す前に決着がつくことが多いけど…。次は翔の番だぜ！頑張ってこいよ！」

「は、はいっす！頑張るっす！」

緊張してたみたいだけど翔も勝った。
俺の番はいつだ？早く回ってきてほしいぜ！

十代ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1609y/

遊戯王ＧＸ～象徴を操る者～

2011年12月4日16時02分発行